
天国の花園

海松房千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国の花園

【Nコード】

N2014H

【作者名】

海松房千尋

【あらすじ】

天国の花園に咲く花は、全部人が見た夢。人がその夢を描いた時に蕾が出来て、叶えた時に花が咲きます。堕天使クルスは綺麗な蕾を見つけて、その花を咲かせる手伝いをするのが大好き。ある時天国で一番綺麗な花の蕾を見て、どうしてもその花が見たくなります。しかしその蕾の主の、小学生のすみれちゃんという女の子は、せっかくクルスが夢を叶えてあげるというのに、その夢がなんなのか、教えてくれません。クルスは無事にすみれちゃんの夢を叶えて、天国の花を咲かせる事が出来るでしょうか？

（前書き）

かなり昔に初めて書いた作品。

キリスト教的な宗教色がかなり強い作品ですが、一切関係ありません。

よかつたらこちらもどうぞ ← ←

[http://hinomarus55.at-ninja.jp/
index.html](http://hinomarus55.at-ninja.jp/index.html)

墮天使クルスの物語。

クルスの見た天国の花の蕾は少女の夢。

少女の名前は『すみれ』ちゃん。

都内の小学校に通う元気な元気な女の子。

でもすみれちゃんには誰にも言えない夢がありました、それは…。
…。

そこは大きな花園です。

見渡す限り何処までも、果てしなく広がっています。

墮天使のクルスはその花園が大好きです。

なぜならその花は、すべてが人の夢。

人の願いが蕾になって、叶えた時に花になる。

夢の花園なのです。

一本で色々な花や蕾が何十個も付いていたり、二つか三つの花や蕾しかないものもあります。中には蔦の様に他の花に絡み付いて養分を吸いとり、自分だけ大きな花を咲かせている花や、寄り添い同

じ一對の花を咲かせているもの、いくつもの花が一つになって大きな一つの花を咲かせていたり、同じ種類の花が一面に咲き誇っていたりもします。

そんな花園をクルスは楽しそうに、でもこっそり、誰にも見つからない様に歩いていきます。

今日もクルスは綺麗な花、珍しい花を探してアッチへうろつろ、こっちへうろつろ。

時々白い羽のお兄さんやお姉さんに見つかって叱られたりもします。

お兄さんがいいいます。

「こらクルス！ お花に悪戯したら駄目だろ！」

お姉さんがいいいます。

「だめよクルス！ それはもうすぐ花が咲くところなんだから！」

でもクルスは全然へっちゃら。

見つけたばかりの綺麗な花をこっそり摘んでしまします。

でも全然悪いとは思いません。

なぜならその花はクルスが手を貸して咲かせた花だからです。

そこは大きな花園です。

見渡す限り何処までも、果てしなく広がっています。

堕天使のクルスはその花園が大好きです。

なぜならその花は、すべてが人の夢。

人の願いが蕾になって、叶えた時に花になる。

夢の花園なのです。

一本で色々な花や蕾が何十個も付いていたり、二つか三つの花や蕾しかないものもあります。中には蔦の様に他の花に絡み付いて養分を吸いとり、自分だけ大きな花を咲かせている花や、寄り添い同じ一対の花を咲かせているもの、いくつもの花が一つになって大きな一つの花を咲かせていたり、同じ種類の花が一面に咲き誇っていたりもします。

そんな花園をクルスは楽しそうに、でもこっそり、誰にも見つからない様に歩いていきます。

今日もクルスは綺麗な花、珍しい花を探してアッチへうろうろ、こっちへうろうろ。

時々白い羽のお兄さんやお姉さんに見つかって叱られたりもします。

お兄さんがいいいます。

「こらクルス！ お花に悪戯したら駄目だろ！」

お姉さんがいいいます。

「だめよクルス！ それはもうすぐ花が咲くところなんだから！」

でもクルスは全然へっちゃら。

見つけたばかりの綺麗な花をこっそり摘んでしまいます。

でも全然悪いとは思いません。

なぜならその花はクルスが手を貸して咲かせた花だからです。

クルスはその蕾を見て思わずため息をついてしまいました。

なんて綺麗なんだろう。

そしてなんて儚げなんだろう。

こんなに綺麗な花なのにどうしてこんなに小さいのかな。

クルスは思います。

この蕾の咲いたところが見たい！

だからクルスは初めてお父さんをお願いしてみる事にしました。

「お父さん、僕この花が欲しい、僕にちょうだい？　だってとても綺麗なんだもの、咲いたところをお父さんにも見せてあげたいんだ！」

クルスはとても真剣に言いました。

でもすぐに白い羽の一番偉いお兄さんがクルスの事を叱ります。

「ダメだよクルス！　この花は人のモノなんだ、絶対無理矢理咲かせたり、咲かない様に摘みとったりしてもいけないんだから！」

クルスもちろんそんな事は知っています。

何時もならそんな事は言わないのに、その蕾があまりにも綺麗だったから、それにまだまだ硬そうで、とてもすぐに咲く様には見え

なかったから、つい言ったらいけない事を言ってしまったのです。

「お父さん、これはどんな夢の蕾なの？ お父さんもこの花が咲いたら嬉しいでしょう？」

お父さんはやっぱりちょっと悲しい顔でにつこり、でもしっかりと首を横に振ります。

「どうしてダメなの？」

なんでダメなのかな？

こんなに綺麗な花が咲いたなら、きっとお父さんだって嬉しいはずなのに。

クルスは決めました。

僕がこの花を咲かせる。

クルスはまだ小さいけれどそのくらいの力はあるのです。

でもお父さんがまた悲しむから要らないって言うておこつ。

「じゃあ要らないよ、お父さん」

クルスが言うと、お父さんは余計に悲しい顔でクルスを見つめます。

お父さんはクルスがどんなに上手な嘘をついても必ずわかってしまふのです。

クルスは自分がいい事をするつもりなのにどうしてお父さんがそんなに悲しい顔をするのかわかりません。

クルスはお父さんを喜ばせたいのです。
すると突然お父さんがクルスを抱きしめてくれました。

クルスの黒い羽には嘘をついたり、地上で勝手に力を使う度に増える小さなトゲが沢山あって、そんな事をしたら怪我をしてしまうのはわかっているのです。

クルスはとても嬉しくて、でもお父さんが怪我をするのが怖くて、悲しくなって言いました。

「お父さん、離して、危ないよ？」

お父さんはもう一度強く抱きしめて言いました。

“クルス、お前も私の大切な子供だよ、愛しているよ”

クルスは嬉しいのに、何故かとても悲しくなっていました。
だからお父さんの手が離れたとたん、慌てて離れて言いました。

「お父さん、忙しいのに邪魔してごめんなさい。今日はもう帰ります！」

どうしてそんなに悲しくなってしまったのかわからないまま、クルスは地上にいました。

もちろんそれは、あの綺麗な蕾の主を探すためでした。

クルスの望みは人が夢を叶えて幸せになる事。

でも、他の天使のお兄さんやお姉さんからはいつもダメだと叱られてしまいます。

でもクルスにはその理由が理解出来ません。

……なんでだろう？

その子の部屋はすぐにわかりました。
やっぱり同じ匂いです。
すぐにその子が入って来ます。

クルスはドキドキしながら声をかけました。

「ねえねえ、君の名前はなんて言うの？」

最初はなかなか気付いてもらえません。

「僕が見えるかい？ 僕はクルス、君の夢を叶える為に来たんだ。
君の欲しいものはなんだい？」

誰もいないはずの部屋で突然声をかけられたからその子はびっくりして目をパチクリ。
じっと見ていると、ゆっくりクルスの姿が見えて来ました。

やんちゃそうな顔をしている同じ年頃のかわいい男の子の姿です。

でも背中から大きな、光沢のある漆黒の美しい羽が生えています。

「どうしたの？ 喋れないの？」

「……まあ、驚いたわ！ あなたは誰？ 天使様？ でも羽が黒いわ、悪魔なの？」

クルスは怒って言います。

「僕は悪魔じゃない！ 堕天使だよ！」

クルスの話す勢いにその子はびっくりしてまた目をパチクリ。

「それは同じじゃないの？」

「違うよ！ 悪魔は堕天使だったけれど、天国には簡単には入れないし、いつも地獄にいるんだ。天使がいつも天国にいて出て来ないのと一緒にだよ！ でも僕らは天国にも地獄にも、もちろんこうして地上にだって行けるんだよ！」

クルスはとても自慢げです。

その様子を見て、なにが可笑しかったのかその子は笑いだしてしまいました。

クルスはその子がどうして笑っているのかわからなかったけれど、思わず自分も笑ってしまいました。

「僕の名前はクルス、君の名前は？」

「私はすみれ、えっと、クルスはどうしてここにいるの？」

「だから言つたろ？ 君の夢を叶えに来たんだ」

それを聞いて大喜びすると思っていたクルスはびっくりしました。

すみれちゃんが突然泣きだしてしまつたからです。

「どうして泣くの？ 君の夢を叶える為に来たんだよ？ 君の夢は何？」

クルスが黒い羽をバタバタさせてすみれちゃんの周りをおろおろしていると、それを聞いたすみれちゃんは少しづつ落ち着いて来ました。

「なぜクルスは私の夢を知りたがるの？ 私の夢を叶える為に来たのに私の夢が何か知らないの？」

「知るわけ無いだろ？ 勝手に見たり出来ないんだから！ それに勝手に人の夢を叶えたりも出来ないんだよ？ ちゃんと『いい』って言うてくれないとね？ だから教えて？ 何がすみれちゃんの夢なの？」

すみれちゃんは答えません。
でもクルスは一生懸命です。

「僕はとても優秀なんだ、今までどんな夢でも叶えてきた。だから

君の夢だつて絶対叶えて見せるよ？ だから教えて？」

すみれちゃんはずいぶん長く考えてました。

「クルスは優秀なの？ 本当に、どんな夢でも叶えてくれる？」

クルスは口の端でチラリと笑いました。

「もちろんさ！ 僕の力を疑ってるの？」

「いいえ、でも、本当にどんな夢でもいいの？」

「もちろんさ」

「じゃあクルスはどんな夢かわからなくても叶える事が出来る？」

クルスはびっくりしました。

こんな事を言われたのは初めてだったからです。

「大丈夫だと思うけど？ でもどうして？」

「私は自分では言えないから。でももし私の夢を叶えたらその時はどうなるの？ 私の魂をとっていつちゃうの？」

「違うよ！ 夢を叶えた時に咲く天国の花が欲しいだけだよ、魂なんていらないよ！」

それを聞いてすみれちゃんはちよつと安心したみたいでした。

「でもクルス、あなたには私の夢を教える事は出来ないの、神様に

お願いした時誰にも言わないって誓ったし、それに……」

「それに？」

「私の願いは――」

なんだろう？

「……罪になるかも知れないから……」

クルスは思いました。

お願いをしたなら、お父さんはすみれちゃんの夢を知ってたんだ、でも罪になるような夢だったから、あんなに悲しい顔をしたに違いない。

……やっぱり止めようか？

でもやっぱりあの蕾が咲いたところを見たい！

「いいよ、どんな夢かは聞かない。でも絶対すみれちゃんの夢を叶えて見せるよ！」

すみれちゃんはまたしばらく黙って考えて言いました。

「いいわ、クルス、あなたにお願いする」

それを聞いてクルスは笑いながら言いました。

「違うよすみれちゃん、これは契約なんだ」

「契約？」

「そう、もし僕が君の夢を叶えたら、つまり君は夢を現実にして僕は天国に咲く花を手にする」

「そういう契約。いいかい？」

「大体いいわ、でも、もう一つ、私には私の夢が何か聞かない事」

「いいよ、簡単さ」

「でもクルス、もし私の夢を叶える事が出来なかったら？」

「そんな事有り得ないけど、その時は君の夢以外の望みをなんでも一つだけ、無条件で叶えてあげる。でもそんな事絶対無いけどね？じゃあ契約する？」

「いいわ？」

クルスが右手を出して、二人は握手をしました。

そのままクルスが宣誓します。

「父の名の下に！」

「……契約はなされた——！」

君の望みはなんだい？

君の夢を叶えてあげるよ。

それは、誘いの様な契約の言葉。

あなたの夢はなんですか？

あなたの――。

……あなたの夢の対価はなんですか？

「さあ、これで契約は終り。早速はじめようか？」

「どうすればいいの？」

「目を閉じて？」

言われた通りすみれちゃんが目を開じる直前。クルスがその羽を大きく広げるところが一瞬だけ見え、凍えそうな冷たい風がぴゅつと吹き付けて来ました。

「きゃ！」

すみれちゃんが悲鳴をあげます。

「大丈夫、もう目を開けていいよ？」

そこはクルスの天使の環だけが明かりの、何処か暗い部屋の中で、潮の香りがします。

壁には貝や海藻がいつぱいついています。

そして、部屋の真ん中には大きな大きな古い飾り箱が一つ、映画で見た様な宝箱です。

「すみれちゃん、これをあげるよ、これは誰のモノでもないし、すみれちゃんは大金持ちだよ？
見てご覧？」

クルスが箱を開けると古い銀細工に金細工、宝石や金貨や銀貨が
いつぱいに詰まっています。

「これは昔の海賊が集めた財宝さ、誰も知らないし、この島はあと何年かで海に沈む。もう絶対に見つからない。だからこれは君がもらってもいいものなんだよ」

そう言いながらクルスは金貨を一枚すみれちゃんの手に乗せて、美しい黄金のティアラを頭に載せます。

「ほら、良く似合うよ、この指輪もピッタリだよ？」

あまりにも綺麗なのと、突然代わってしまった景色に呆然としていたすみれちゃん。

やっと動ける様になった時には、頭にティアラと王冠、首が動かないほどのネックレスに、ポケットにも宝石やアクセサリーや小物類がいっぱい、両手に山盛りの金貨や銀貨――。

余りの重さにフラフラです。

「く、クルス！ やめて！ わたし潰れちゃうわ！」

「あ、ごめんよ」

すみれちゃんは財宝を箱に戻しながら言います。

「クルス！ こんな私の夢じゃないわ！ 私には必要ない！ それに靴くらい履かせてよ、靴下がぐちゃぐちゃになっちゃったじゃない！」

「……ごめんよ、すみれちゃん、でもやっぱりこれじゃダメか。もしたら一度お部屋に戻るね？」

風がぴゅーっと吹き付けました。

「きゃ！」

気が付くとすみれちゃんは濡れた靴下のまま自分のお部屋に立っています。

「……夢じゃないわよね？」

と、突然部屋の扉が開いてすみれちゃんの靴と靴下を持ったクルスが入って来ました。

「すみれちゃんの靴はこれだね？ 早く履き替えて行こうよ！ 次はすみれちゃんの夢に叶うかもしれないよ！」

首から金のネックレスを付けたままのクルスは、良く考えると墮天使と言われても違和感いっぱいのだ姿です。

すみれちゃんは不思議な気持ちで思いました。

墮天使ってみんなこうなのかしら？

すみれちゃんはやっと落ち着いてクルスの姿を観察出来る余裕が出て来たのです。

クルスのその時の姿は、ハーフの3サイズくらいは大きなダブルのカーゴパンツ、メッシュのバスケットで使う様なやつぱりダブルのタンクトップ、リストバンドに腰には銀のチェーン。

しかもさっきの宝物の中にあつた十字架の付いた長いチェーンです。

多分一〇〇パーセントのストリート系。

黒い羽には似合うのかな？

ナイキのシューズもクールな――！

「クルス！ お部屋で靴を履かないで！」

「はい！」

慌てて靴を脱ごうとしたクルスが言います。

「……でもすみれちゃん、足跡は付いて無いでしょう？ 僕は歩いてるけど床に足をつけて歩いてる訳じゃ無いんだよ？」

「そうなの？」

「そうなの。だって足跡なんて無いでしょう？ ねえそろそろ準備終わった？ 次に行ける？」

「——いいわ」

「良かった！ じゃあいくよ！」

風がぴゅーっと吹き付けました。

「きゃ！」

すみれちゃんはどうしてもこの風には慣れる事ができません。まるで全身の骨が凍りつくような気がするのです。

そして、風の香りが変わりました。

「さあすみれちゃん。ここは地上で一番美しい場所なんだ。ここから見える範囲の全てを君にあげるよ」

すみれちゃんは思わず息を吞みました。

二人は空を飛んで、大きな島を見ていたのです。

美しい滝、緑の山々に川が流れ、小鳥がさえずり、動物達が駆け
ています。

クルスはすみれちゃんの横を飛びながら言います。

「どう？ 他にもあるんだよ？ 目を閉じて！」

目を閉じると風がぴゅーっと吹き付けました。

今度は海の底に立っています。

でも息も出来るし服も濡れていません。

でももっと驚いたのはその美しさでした。

色とりどりの綺麗な魚達に美しい珊瑚達――。

海面から差し込む光は、まるで夢を見ている様です。

「どうだい？ この海も君のものだよ？ 鳥も動物も虫達だって、
決してすみれちゃんを傷つけたりしない。だってここは君のものに
なるんだから――！」

クルスはとても得意そうです。

すみれちゃんは目を輝かせながらそれを見ていましたが、首を振
って言いました。

「ここは素敵だけれど、私の欲しいものじゃないわ」

「ふう、やっぱりダメか。でも後で欲しいって言ってもダメだからね？」

すみれちゃんが頷くと、また風がぴゅーっと吹き付けて来ました。

そこは何処かの山奥の小さな泉です。

真ん中に蓮によく似た美しい花が咲いています。

「すみれちゃん、これは世界に一つだけ残った最後の花だ。これを食べたらすみれちゃんは不老不死になれる。どう？　すごいでしょう？」

「クルス？　本当に死なないの？」

「そうだよ？　自分で自分を殺さない限り絶対死なない」

「……じゃあこれを食べた人は全員地獄へ行かなきゃいけないのね？」

クルスはびつくりしました。

これを食べる前にそれに気が付いたのはすみれちゃんが初めてだったからです。

「……そうだよ、でも死ななければいいだけだよ？」

「天国にも行けずにね？　ねえクルスもう止めにしない？　いくら観ても無駄だと思うわ？」

私の夢はこんなのと全然違うの」

「……ダメだよ、すみれちゃん、お父さんの名前で行った契約は絶対破る事は出来ない」

すみれちゃんは急に怖くなって来ました。

クルスの声がまるで別人の様に恐ろしく響いて来たからです。

「君の夢を叶えるまでは僕は絶対諦めない。君の夢を聞く事もしない。だから君は僕が見せる全てを見て正しいかどうかを言わなきゃいけない。途中で止めたり出来ないんだよ？」

その声に、すみれちゃんは足がふるえてきます。

「だつて……」

クルスはすみれちゃんを見つめていいました。

「——これは、契約なんだから——……」

4

契約とは神聖なもの。

それが例えどんな内容であつても——。

……事前に契約内容のご確認を。

すみれちゃんは怖くてたまりませんでした。クルスがお父さんと言った時の表情が優しかったので何とか我慢出来ました。

「クルス、じゃあ言うわ、これは、私の夢とは違うの、だから……」

「そうだね、僕もこんなに簡単だとは思ってなかったよ？　じゃあ次に行こう！」

そういうクルスは、不思議ともう怖くありませんでした。

風がぴゅーっと吹き付けて来ます。

今度は暗い大きな部屋に二人で立っています。
部屋の壁の一つは全て鏡張りです。

「すみれちゃん、見て？」

なんだかわからないまますみれちゃんは鏡の中を覗きます。

「どうだい？」

鏡の中には、見たこともないほど可愛い、でもやっぱりすみれちゃんの顔をした女の子が大きな瞳でパチクリ。

「これですみれちゃんは学校でも、いいや、世界で一番魅力的な女の子だよ、これから会う人はみんなすみれちゃんを大好きになる」

「クルス、こんなの私じゃないわ」

「でもすみれちゃん、これならすみれちゃんは女王様になつてなれるんだ、どんな事だつて思いのままなんだよ？　どんな夢だつて叶うはずだよ？」

「クルス、ダメよ？　こんなの私の夢じゃない」

クルスがため息をついて、風がぴゅーっと吹きました。

「さあ、すみれちゃん、今度はどうかな？」

すみれちゃんが目を開けると、今度は映画の様に何かが見えて来ました。

どこかすみれちゃんのお母さんに似た人が大きなビルの大きな部屋でお仕事をしています。

「クルス？　これは誰？」

「これは未来のすみれちゃんだよ？　すみれちゃんは世界一の学者さんで天才なんだ。

最年少でノーベル賞をもらつてるし、一度だけじゃなくて、何度ももらつてる。もちろんそれだけじゃ無いよ？　すみれちゃんが作った会社はどんどん大きくなつてるし、間違いなく世界一になる。全部すみれちゃんの力だよ？　どう？　これならすみれちゃんの夢も叶うでしょう？」

すみれちゃんはその映像をみながら言います。

「ねえクルス？　これは本当に未来の私なの？」

「すみれちゃんが『いい』って言ったら。……これですみれちゃんの夢が叶うならね？ この通りになるよ」

「ねえ？ 私の家族は何処にいるの？」

「すみれちゃん、今はそんな事関係無いだろ……」

クルスはそう言ってから、目を輝かせてすみれちゃんを見つめます。

「すみれちゃんわかったよ？」

「クルス？ 何がわかったの？」

振り向いたすみれちゃんは背筋が凍る様な気がしました。
なぜならクルスがとても恐ろしい表情で笑っていたのです。

「すみれちゃん、これはすみれちゃんの夢？ すみれちゃんの夢はこれで叶えられる？」

すみれちゃんは怖くて声が出ません。でもなんとか横に首を振る事が出来ました。

「やっぱりね？」

その言葉はまるで氷の様にすみれちゃんを震わせます。

「……クルスは、何がわかったの？」

「すみれちゃん、すみれちゃんの夢は、きっと家族に関係する夢な
んででしょう？」

「クルス？ それは聞かない約束じゃなかったの？」

「聞いてないさ、わかったから確認しただけ。……次に行こう」

風がぴゅーっと吹き付けて来ます。

今度はお母さんが素敵なドレスを着て大きな船の上で誰かとダンスをしています。

その人はどこか、死んだすみれちゃんのお父さんに良く似ています。

「すみれちゃん、お母さんはお金持ちで優しいとても素敵な人からプロポーズされてる。もうお金に苦労しなくてもいいし、毎日すみれちゃんと一緒にいられる。すみれちゃんもお父さんが欲しかったんでしょ？ それに死んだお父さんとそっくりなはずだよ？」

すみれちゃんは、何故か理由もわからないまま、悔しくて涙が出て来ました。

「違うわクルス、こんなの私の夢じゃない。お父さんは欲しいけど、だからって新しいお父さんなんて要らない！」

「でもすみれちゃん、死んだ人は生き返らないんだよ？」

すみれちゃんは溢れてきた涙を拭いながら、叫ぶように答えます。

「違う！ そんな事関係無いの！ ……それにこんなの私の夢じゃない！ 何度も言わせ無いで！」

部屋に戻っても泣いているすみれちゃんを見てクルスの表情が曇ります。

「すみれちゃんは どうして泣いてるの？」

「あなたにはわからないわ！」

「どうして？」

「堕天使だからよ！」

「すみれちゃん……」

クルスは本当に困ってしまいました。クルスはすみれちゃんを泣かせたり悲しくさせたくなんてなかったからです。でもそこでもう一つの事に気が付きました。

すみれちゃんは母子家庭でお父さんが死んだ後二人きりで生活しています。もう一人妹がいたのです。

「すみれちゃん？ すみれちゃんは妹がいたんだね？」

すみれちゃんの肩がピクリと動いて、涙がピタリと止まりました。

「そうよ……」

「何処にいるの？」

「病気で入院してるわ」

「そうか、お父さんと同じく心臓が弱いんだね？ それにもっと悪い」

「……そうよ」

クルスが口の端で笑って、風がぴゅーっと吹き付けて来ました。

すみれちゃんの目の前には病気の妹が寝ています。
ビニールの箱の中で機械に囲まれて寝ています。

「私と同じ日に一緒に生まれた私の妹……」

「治らない事はないね？」

「そうよ、でも治すには心臓が必要なの！ 生きたままの、他の人の心臓がね！」

そう言ったすみれちゃんはびっくりしてしまいました。

クルスが突然笑い出したからです。

でもすみれちゃんは、笑っているクルスが怖くて声が出ません。

「なーんだ、簡単じゃないか」

すみれちゃんは怖くて仕方ありませんでしたが、勇気を振り絞っ

て聞きました。

「何が簡単なの？」

「だって、すみれちゃんは妹に健康になって欲しいんでしょう、それがすみれちゃんの望みじゃない？」

「そんな感じよ、でもそれは聞かない約束よ！」

「わかってるさ、でも僕なら簡単に新しい心臓を手に入れられる」

「でも生きている人の心臓が必要なよ！ わかってるの？」

「簡単さ、君の妹にぴったりの心臓ならいくらでもあるんだから」

「でもクルス、その心臓は生きてる誰かの心臓なんですよ！」

「そうだよ？ 大丈夫、僕は優秀なんだ必ず手に入れてみせるから、待ってて……」

「止めてお願い！ 私は妹に健康になって欲しいけど、妹のために他の誰かに死んで欲しいなんて思わない！ そんなのは私の夢じゃない！」

クルスには意味が分らないようでした。

「でも、みんな心臓は一つしかないんだから……」

そこでクルスは気がつきました。

「すみれちゃん？ 他の誰かについて言ってたよね？ それなら——誰なら、死んでもいいのかな？」

すみれちゃんは答えません。

「それは、もしかして……」

涙を拭いたすみれちゃんが、ふいにクルスに微笑みます。

「さあ、私の夢がわかったんでしょう？ 私は見たいと思ってた以上のモノまで見たしね？」

天国のお父さんに会えなくなっちゃうのは寂しいけど……。でも十分楽しかったわ？ だから今度はこの子の番。私の心臓をこの子にあげて！」

クルスには出来ません。

すみれちゃんの夢は何か欲しいという夢では無いからです。

クルスに与えられるモノは何もありません。

それに何より、クルスはすみれちゃんに死んでほしくありません。クルスはもうなにも言えません。

どうしたらすみれちゃんの夢が叶うのか？

それしか考えられません。

そして、クルスは生まれて初めて泣きなくなりました。

クルスが、すみれちゃんの夢を叶える、たった一つの方法に気がついたからです。

泣いているすみれちゃんを見ていたクルスの目に、涙があふれてきました。

そしてクルスの目に貯まった涙が一粒落ちた時。

風がぴゅーっと吹き抜けていきました。

クルスは病院の見える公園の近くの道を歩いていました。
クルスが歩く度に小さな、疲れきった引きずる様な足音が聞こえます。

それに、クルスにはもう、あの美しい漆黒の羽はありませんでした。

立ち止まったクルスに、夕陽が最後の光を一瞬間かせクルスの身体を包みました。

優しい光の中で微笑み、初めてクルスは祈りました。

……お父さん僕を許して下さい。

夕陽が消えた時、大きな音がして、クルスから全ての力が風と一緒に消え去りました。

5

堕天使クルスとすみれちゃん。

すみれの夢。

クルスの望み。

二つの想いは――？

気が付くと、すみれちゃんは疲れた表情で、病室の堅い椅子に腰掛けたまま寝ているお母さんを見上げていました。

すみれちゃんは寝ているお母さんの膝に頭を載せて寝ていたのです。

扉がノックされ目を覚ましたお母さんが立ち上がると、待ちきれなかった様にお医者さんが入って来て言いました。

「お母さん、手術が出来ます、移植の準備ができたんですよ！ すみれちゃん良かったね？ 妹さん、きつとすぐに良くなるよ？」

お母さんは突然の事で何も言うことが出来ません。
すみれちゃんはびっくりして言いました。

「どうして？ 私の心臓をあげるわ！ 他の誰かの心臓なんて要らない！ 誰か他の人に死んで欲しくなんてないの！ 一体誰の心臓なの！」

お医者さんは驚きましたが、静かにすみれちゃんに言いました。

「心臓の持ち主はすぐ近くで事故にあった外国の子で、君達と同じ年の子だった。……悲しいけど――」

すみれちゃんにはもう何も聞こえませんでした。
考える事もできなくて、そこから逃げる様に走り出した瞬間、入
って来ようとした女の人にぶつかってしまいました。

その女の人は悲しそうにお母さんに微笑み、すみれちゃんにはわ
からない言葉で何かを話しました。

お医者さんがお母さんにその言葉を伝えると、お母さんが頷き、
その人は鞆の中から一枚の写真を取り出しました。

「写真の子が心臓をくれた子だって、この人の弟さんなんだって。
すみれに写真をもらって欲しいんだって……」

お母さんは泣き出してしまいました。
その人はすみれちゃんに写真をわたし、一言呟きました。
その言葉だけはすみれちゃんにもわかりました。

「クルス」

すみれちゃんが繰り返します。

「クルス」

すみれちゃんの目から涙が溢れます。

「それが写真の子の名前だって」

お母さんがいました。
すみれちゃんには、涙でにじんだその人の背中に真っ白い大きな

羽がみえました。

すみれちゃんは聞きました

「クルスは？」

その人は少しだけ微笑み、まっすぐ上を見つめ瞳を閉じました。

「お父さん！ どうしてここにこの花が咲いているの？ この花は誰の花？」

黒と言うより灰色の羽、でも広げても、赤ちゃんの手と同じくらいの大きさの羽をした男の子。

そうクルスです。

「お父さん、これはすみれちゃんの花じゃないの？」

お父さんはにつこり微笑んでクルスを抱きしめてくれました。
そして、いつの間にか沢山の花の蕾がついたすみれちゃんの花を見せてくれたのです。

クルスにもわかりました。

その花はクルス自身が咲かせたものだったのです。
クルスは嬉しくなって思いました。

すみれちゃんにはもっともっと、沢山の花を咲かせて欲しいな！

それを見ていたお父さんは満面の笑みを浮かべ、もう一度クルス

を抱きしめてくれたのです。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014h/>

天国の花園

2010年10月10日07時30分発行